

श्रीगुरुपदेश ——— शुरी・गुल・उपदेश्य शुरी・गुलの導き

アミ・バンサルによる解説

本日、2026 年7月 29 日の「シュリー・グलへの崇敬」からの言葉は「シュリー・グल・ウパदेश्य」——つまり「シュリー・グルの導き」——です。グルプールニマーという神聖な日に、私たちの意識の中に刻む言葉として、何と完璧な言葉でしょう！

サンスクリット語のウパदेश्य(upadesha)という語は二つの部分から成ります。一つ目は接頭辞 **upa** で、これは誰かまたは何かに近づく、または近くにいることを意味します。**desha** という語は、**dish** という語根から派生し、これは「指摘する」「指示する」「示す」という意味です。これらが組み合わさった語であるウパदेश्यは、人を何かに向かわせる、あるいは導くことを意味します。従って、ウパदेश्यは「導き」「教え」「指示」「指導」「助言」などと訳されます。

インドの教典では、ウパदेश्यとは具体的にグルの導きと定義されています。この導きは——生徒が理解し、吸収し、積極的に実践する時——生徒を神へ、大いなる自己の知識へと導きます。

インドの教典の伝統における最も古典的なウパदेश्यの幾つかは、ウパニシャッドの中に見られます。その中には、例えばタットワマシ、「汝(なんじ)はそれである」のような、マハーヴァーキヤ——「偉大な言明」——があります。ウパニシャッド

という言葉は、文字通りには、「近くに座る」という意味です。ウパニシャッドとウパデーシャという言葉を組み合わせると、美しいイメージが思い浮かびます。

大いなる自己を実現したグルの傍らに献身的に座る生徒は、ウパデーシャ —— 大いなる自己の知識へと導く方向性や指導 —— を受け取ります。

ウパニシャッドの時代には、真にグルの導きを切望し、大いなる自己の知識を得たいと願う生徒だけが、グルのウパデーシャを受け取ることができました。従って、ウパデーシャは本質的に生徒の積極的な取り組みを必要とすることを理解することが重要です。グルの教えが根付き、実際に生徒を目標へと導くためには、生徒は熱心に研究し、学びたいという強い願望を持たなければなりません。また、生徒はグルの導きに従いたいという深い切望を持たなければなりません。彼らはムムクシュトウワ——神を知り、解放を達成したいという、抑え難く、断固とした切望——を持っていないといけないのです。

ウパデーシャは、近いことによって真価を発揮します。従って、生徒はグルに近づく時に、グルのウパデーシャの真の力を体験するのです。「グルに近づく」とはどういう意味か、あなたは疑問に思うかもしれません。生徒はどのような方法でグルに近づくことができるのでしょうか？ 実のところ、その方法は数多くあります。例えば、グルに対する深い敬意と献身を育むこと、グルに奉仕したいと切望すること、グルの教えに注意深く耳を傾けること、そして学びと実践の時間を最優先にすることなどが含まれます。

古代において、生徒たちはシュリー・グルのウパデーシャを受け取るために、物理的にグルのそばにいない必要ありませんでした。現代では、シッダ・ヨーガの道においては、テクノロジーのおかげで、私たちはどこにいてもシュリー・グルの導きを受け取ることができます。もはや物理的な場所に縛られることはありません。シッダ・ヨーガの道のウェブサイトをクリックして開けば、まるでグルの教えを受け取る準備をして、シュリー・グルの蓮の足元に座っている様子を思い描くことができます。そして、それらの教えを受け取ったら、それらを常に意識の中に持ち続け、継続的な学び、熟考、実践を通じて、自分の人生において具現化していきます。

インドの教典に見られるウパデーシャのもう一つの意味は、「伝授」です。このことから、言葉はしばしばシュリー・グルのウパデーシャを伝える手段であるものの、その力は言葉の域を超えていることが分かります。このウパデーシャは、グルのシャクティ、すなわちグルの変容をもたらすエネルギーを、生徒に直接伝えるものです。生徒がその教えを心に刻むことを選び、学び、人生に取り入れる継続的な努力をするなら、この神秘的な英知は徐々に生徒をあらゆる制約から——つまり、自己不信や無価値感、恐怖など、自分を小さく感じさせるあらゆるものから——解放します。強力かつ恩恵に満ちて、グルのウパデーシャはあらゆる誤解や誤った認識の根源に直接打撃を与えるのです。

大いなる自己としての自分自身の真の性質への無知は、幾重もの生を通じて深く根付いた概念的な誤りに起因します。単なる学習や行動だけではそれを打ち破

ることはできません。だからこそ、グルのウパデーシャは非常に貴重であり、生徒がその重要性を認識し、受け入れることが不可欠なのです。

グルのウパデーシャをどのように受け止めているかを振り返ることは、生徒にとって常に有益です。生徒は次のような問いを自らにすることができます。「私はグルが言っていることを自分や自分の人生に関係あるものとして心から受け止めているだろうか？ 私はグルが私に教えていることを理解しているだろうか？ 私はグルが言っていることのすべてを聞いているだろうか？ それとも、その瞬間に自分に響く部分だけを選び取っているのだろうか？ 自分が簡単に実践できそうな部分、あるいはその時に『必要』だと感じる部分だけに焦点を当てているのだろうか？」

シッダ・ヨーガの道を歩む生徒として、私たちは時折このように自らに問い、そしてその答えに正直でなければなりません。私たちは自らのサーダナーに全責任を負わなければなりません。グルのウパデーシャに信頼を寄せ、それを真摯(しんし)に実践することで、私たちは深い内省へと突き動かされます。そして、日々この内省を続けることで、私たちは徐々に自分自身の内側に変容を体験し始めます。

『ブリハッドアーラニヤカ・ウパニシャッド』は、ブラフマン——絶対なる者、万物の大いなる自己——を「ネーティ、ネーティ」、すなわち「これではない、これでもない」と表現しています。要するに、大いなる自己は、私たちがそれに関連付けがちな外的な同一性によって定義することはできず、従って、大いなる自己の「体験」には類例がないということです。ですから、サーダナーにおいてグルのウパデーシャを指針とすることで、私たちは最終的に「自分ではないもの」という層を一つずつ脱ぎ捨て、真の性質を輝かせることができるのです。

グルマーイのウパデーシャは、さまざまな形で私たちに届きます。彼女の導きは、話す言葉や文章による教え、沈黙、そして何気ない会話やしぐさの中にも生きています。瞑想、夢、そして自然の中でグルマーイを体験することの中にも、彼女のウパデーシャがあります。グルマーイの生徒として、グルのウパデーシャを彼女が私たちに伝えるあらゆる方法の中で認識し、そしてそれを学び、実践する意欲と準備ができていることは、私たちの神聖な責任なのです。

何年か前、瞑想中に、私はグルデーヴ・シッダ・ピートゥでグルにグルセーヴァをさげている自分の姿を見ました。グルマーイが私のいる部屋に入ってきたので、私は敬意を表して立ち上がりました。黄金色の光が彼女を包んでいました。そして、彼女は私にグルの導きの本質について語りました。

グルマーイは言いました。「グルの導きは神の光から生じます。人がその導きを真に受け入れる時、それは再び神の光へと変わります。このようにして、グルの導きは人に神聖な光の体験を与えるのです」



© 2026 SYDA Foundation®. 著作権所有。

¹ Brihadaranyaka Upanishad, 2.3.6.